

『 On-line みんなで法華経を学ぼう! 』 vol.9

Dec.2022

— Let's embark on a journey to discover our own “perspective on the Lotus Sutra” .
(みんなで“法華経観”を見つける旅に出よう)

『妙法蓮華経 信解品第四』 (迹門・正宗分)

- 『又如来の滅度の後に、若し人あって妙法華経の乃至一偈・一句を聞いて一念も
随喜せん者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』 (法師品 二〇二頁 終五行)
- 『其の習学せざる者は 此れを曉了すること能わじ』 (方便品 八十二頁 四行)
- 「習学」の3つのステップ 「聞解・思惟・修習」
(『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たり』 (法師品 二〇九頁三行))
- 『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくこ
とを得たりと知れ』 (法師品 二〇九頁 三行)
- 『十分の一でも実践できれば、いや、その一つにでも徹することができれば、
りっぱな精進といえる』 (『新釈法華三部経 第一巻』 P8・8行/P5・1行)

※表記 例：(P353・1行/P259・7行) ⇔ (『新釈・文庫版』頁数/『新釈・単行本』頁数)



< 譬諭品の復習 >

『今日乃ち知んぬ。眞に是れ佛子なり。佛口より生じ法化より生じて、佛法の分を得たり』
(八五頁 二行)

- ・十八不共の法 — 仏の十八の特質 (P45・終5行/P32・3行)
- 【過ちがない行動】 — ①身に失なし (行いに過ちがない)。②口に失なし (言葉に過ちがない)。③
念に失なし (心に散乱がなく、間違った考えを持たない)。
- 【心の持ち方】 — ④異想(いそう)なし (選り好みや、えこひいきがない)。⑤不定心(ふじょうしん)なし
(行住坐臥、禅定の境地でいられる)。⑥知り已(おわ)って捨てざるなし (諸行無常がわかっている、
心に執着がない)。
- 【衆生済度の心のはたらき 六つの徳】 — ⑦欲無減(よくむげん) (一切衆生を救おうという意欲が、減
ることがない)。⑧精進無減 (一切衆生を救おうとする精進が、減ることがない)。

- ⑨念無減(ねんむげん) (衆生を思う一念がいつも変わらない)。⑩慧無減(えむげん) (仏の智慧が無限)。
 ⑪解脱無減(あらゆる欲望や煩惱から、完全に解脱している)。⑫解脱知見無減(けだつちけん むげん)
 (自らの解脱とその順序を、つまびらかに知っている)。

○【智慧に基づく身・口・意の三業】 — ⑬一切の身業(しんごう)智慧に随(したが)って行(な)う (正しい行動
 ができる) ⑭一切の口業(くごう)智慧に随(したが)って行(な)う (正しい言葉づかいができる) ⑮一切の意業
 (いごう)智慧に随(したが)って行(な)う (正しい思考ができる)

○【智慧によって三世を知る】 — ⑯智慧をもって過去世を知ること無碍(むげ)なり (過去を正しく振り
 返ることができる) ⑰智慧をもって未来世を知ること無碍(むげ)なり (未来を正しく予見することができる)
 ⑱智慧をもって現在世を知ること無碍(むげ)なり (現在を正しく見通すことができる)

・よく捨てるものはよく得る— この「よく捨てる」ということが〈無限のものを得る〉秘訣だとい
 うことを、われわれはよく心得ておかなければなりません。 (P49・5行/P34・終6行)

『我定めて當に作佛して 天・人に敬わることを爲 無上の法輪を転じて 諸の菩薩を教化すべ
 し』 (八七頁 二行)

・正法・像法・末法 (P94・4行/P69・2行)

〈正法〉 仏の教法が正しく行われ、教・行・証がそろっている時代

〈像法〉 教えと行が形式で残るが、教と行があって、証のない時代

〈末法〉 教えだけが残り人々が見失い、行と証が失われた時代

	教	行	証
正法	○	○	○
像法	○△	○△	×
末法	△	×	×

・五蘊・ごうん (五蘊盛苦)

(P106・1行/P79・4行)

①〈色・しき〉 ②〈受・じゆ〉 ③〈想・そう〉 ④〈行・ぎょう〉 ⑤〈識・しき〉。

・三車火宅の譬え

(P116・1行/P86・終行)

〈唯一門・たたいちもん〉— 「我を捨てる」こと。縁起の法則を知り我を捨てる。
 「諸法実相」。すべては平等。

〈覚えぬ 知らず 驚かず 怖じず〉— 物質的満足に夢中になるばかりに。生老病死の苦が襲うこ
 とを知らず、貪欲を抑えない。

〈我身手(しんしゆ)に力あり。當に衣被(えこ)を以て〜 舍より之を出すべき〉— 「他力」だけで救う
 のではなく、本人が悟らなければ、本当の救いにはならない。

〈火〉— 「我・貪欲」。

〈舍・いえ〉— 娑婆世界・人生。

〈失う〉— ほんとうの生き方を見失う。

〈父を視て已(や)みぬ〉— 仏の教えを知っても自分の人生に当てはめて考えようとしぬ。

〈羊車・ようしゃ〉— 「声聞乗」。いい教えを聞いていれば、心が休まる。

〈鹿車・ろくしゃ〉— 「縁覚乗」。一人静かに教えを深くかみしめ、悟りを得ようとする。

〈牛車・ごしゃ〉— 「菩薩乗」。人を幸せにすることによって、生き甲斐、喜びを得る。

〈其車高広(ごしゃこうこう)〉— この教えを体得した人の志が高く、心が広々している。

〈衆宝莊校(しゆほうしょうきょう)〉— 人格が善い徳が整い、「善行」によって光り輝く。

〈周市欄楯(しゅうしつらんじゆん)〉— 悪を押し留める心の手すりがかかりしている。

〈四面懸鈴(しめんげんりやう)〉— 教えを体得した人は、人々の心を清めていく。教化力。

〈張設幢蓋(ちやうせつてんがい)〉— 教えを体得した人は、衆生を守り、かばう力を持つ。

〈雜宝嚴飾(ざつぼうごんじき)〉— さまざまな方便の教え。人に応じて説く大智慧を持つ。

〈宝繩絞絡(ほうじょうきやく)〉— 「四弘誓願」はじめ、上求菩提・下化衆生の様々な誓願を持つ。

〈纏延丹枕・おんねんたんちん〉— 心に乱れがなく安らかで安定。禅定と智慧を具える。
 〈駕以白牛・がいびやくご〉— 世のけがれに染まらず邪心がない。行為が清らかな心で行う。
 〈膚色充潔・ふしきじゅうけつ〉— 智慧のはたらきがイキイキして、正しく充実している。
 〈形体姝好・ぎようたいしゅうこう〉— 智慧のはたらきが正しく、素晴らしい形で現れる。
 〈有大筋力・うたいにんりき〉— 人の迷いを除く力が極めて強い。
 〈行歩平正・ぎようぶびょうじょう〉— 真理に基づき、中道で調和のとれた考え方・生き方。
 〈其疾如風・こしつによふう〉— 教えに乗って行けば、まっしぐらに仏の悟りに到達する。
 〈僕従侍衛・ぼくじゆえい〉— 自然と多くの者がその後についてくる。大事に護衛する。
 〈魑・魅・魍魎・ちみもうりょう・夜叉・悪鬼あり〉— 「邪見」。因果の法則を無視した、よこしまな考え。
 〈其の喉鍼の如し〉— 「見取見」。間違った思想に固執して、他を受け付けず排他的。
 〈今此の舎宅は一の楽むべきなし〉— 自己中心の楽しみは、真の楽しみではない。

『先に遊戯せしに因って 此の宅に來入し』 (一〇四頁 八行)
 『長者聞き已って、驚いて火宅に入る』 (一〇四頁 終四行)
 『三界は安きことなし 猶お火宅の如し』 (一〇七頁 五行)
 『亦復何者が是れ火、何者が爲れ舎、云何なるかを失うと爲すを知らず』 (九四頁 六行)

・智・慈・法は減ずることなし (P158・終4行/P118・終5行)
 人に与えれば与えるほど多くなるのが、智慧であり、慈悲であり、教えなのです。

・三 毒 (P173・終2行/P130・3行)

〈貪・とん〉 物や名誉、権威、他人の愛情を貪り、自分のみならず人をも傷つける。
 〈瞋・じん〉 わがままから起こる怒り。自己中心の怒り。
 〈痴・ち〉 真理を知らず、また知ろうともせず、目先のことしか考えない愚かさ。

・火宅の意味 (P225・1行/P169・終5行)

「その宅久しく故りて復頓し〜」 人の心の姿。正法を聞き心の掃除と手入れが必要。

「鴉・梟・鵂・鷲〜」 「慢心」。自己中心で、他者を輕蔑し、批判する心。

「蛇・蝮・蠍〜」 「瞋・怒り」。わがままな怒りは人を刺し、噛んで毒を与える。

「鼯・狸〜」 「痴」。暗い所を好む。つまり智慧の光を好まず、無明の中をうごめく。

「屎尿の臭き処〜蚊・蠅・諸虫〜」 「疑・猜疑心」。高い教えを敬遠する。

「咀嚼踐踏し死屍を〜」 「貪」。貪欲に満ちたあさましい姿。貪の心で満ちている。

以上の「貪・瞋・痴・慢・疑」を、五つの迷い「五惑・ごわく」と言います。

「魑・魅・魍魎・夜叉・悪鬼あり〜」 「邪見」。因果の法則を無視した、よこしまな考え。

以上「貪・瞋・痴・慢・疑」の「五惑」と「見」(邪見)を加えて「六大煩惱」という。

「鳩槃荼鬼〜」 「戒禁取見」。正しい因果によらず、間違った教えや戒律に執着する。

「其の身長大に〜」 「身見」。仮の身である五蘊によって出来た身を実体だと思ふ。

「其の喉鍼の如し」 「見取見」。間違った思想に固執して、他を受け付けず排他的。

「或いは人の肉を食い」 「辺見」。一方的な極端な考え。偏見。

「今此の舎宅は一の楽むべきなし」 「自己中心の楽しみは、真の楽しみではない」。

『三界は安きことなし 猶お火宅の如し』 (一〇七頁 五行)

・主・師・親の三徳 (P281・終6行/P213・4行)

日蓮聖人はお釈迦さまのお徳を賛嘆。〈主の徳〉とは「一切の衆生を守護して下さること」。〈師の徳〉

とは「一切の衆生を教え導いてくださること」。〈親の徳〉とは「一切の衆生を慈愛してくださること」。

『【主】今此の三界は皆是れ我が有なり／【親】其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり／』

『【師】而も今此の處は諸の患難多し唯我一人のみ能く救護を爲す』 (一〇七頁 終五行)

『諸苦の所因は貪欲これ本なり若し貪欲を減すれば依止する所なし』 (一〇九頁終六行)

・教えを信ずるものは仏を見る (P310・3行/P235・終2行)

『若し人能く汝が所説を信ずること有らんは即ち爲れ我を見亦汝及び比丘僧并に諸の菩薩を見るなり』 (百十頁 六行)

『若し人信ぜずして此の經を毀謗せば則ち一切世間の仏種を断ぜん』 (百十一頁 二行)

・十四謗法の罪(罰は自分が自分に与えるもの) (P325・4行/P246・終2行)

『其の人命終して阿鼻獄に入らん〜』 (百十一頁 七行)

・法華經を説く対象(法華經は誰のためにあるか) (P341・1行/P260・1行)

『利根にして智慧明了に多聞・強識にして仏道を求むる者』 (百十四頁 三行)

『諸の善本を植え深心堅固ならん』 (百十四頁 五行)

『常に慈心を修し身命を惜まざらん』 (百十四頁 六行)

『悪知識を捨てて善友に親近する〜大乘經を求むる』 (百十四頁 終四行)

『嗔なく質直柔輒にして常に一切を愍み諸佛を恭敬せん』 (百十四頁 終行)

『大乘經典を受持して乃至余經の一偈をも受けざる』 (百十五頁 四行)

『佛舍利を求むるが如く是の如く經を求め』 (百十五頁 六行)

※四法成就 (『新釈法華三部經 第9卷 P419・終4行/P313・1行』)

①自分は仏さまに生かされ、守られているのだということを、確信すること。(『一には諸佛に護念せらるることを爲(え)』)。

②いつも善い行いをするように心がけること。(『二には諸(もろもろ)の徳本(とくほん)を植え』)。

③いつも正しい信仰者の仲間に入っていること。(『三には正定聚(しょうじょうじゆ)に入(い)り』)。

④いつも社会全体を良くすることを目指すこと。(『四には一切衆生を救うの心を發(おこ)せるなり』)。



<信解品のあらすじ>

【四大声聞の懺悔】――

世尊が『譬諭品』でお説きになった『三車火宅の譬え』を伺い、**四大声聞(摩訶迦葉・まかしょう、慧命須菩提・えみょうしゆぼだい、摩訶迦旃延・まかかせんねん、摩訶目犍連・まかもけんれん)**は、①世尊が『方便品』で説かれた『諸法実相』の教えの意味。そして、②さまざまな『方便』を用いて『すべての人に自身の仏性を発見させ』、『仏の境地を悟らせる』という仏さまの大慈悲を、心の底から信解することができました。

【一六頁 一行】四大声聞は以上の真実を知ることができた、そして舍利弗に成仏の保証を授ける授記を目(ま)の当たりにして、心から歡喜踊躍(かんぎ ゆやく)したのでした。

四大声聞は感激で全身を震わせて立ち上がり、衣服を整え、畏敬(いがい)の意味を示す右肩をあらわにして、右の膝(ひざ)を地につけて跪(ひざまず)き、身を折り曲げて深々

と合掌礼拝しました。そして世尊の顔をじっと仰ぎ見て次のように申し上げました。
【一六頁五行】『我等僧の首(はじめ)に居(こ)し、年并(としならび)に朽邁(くまい)せり』 「私たちは僧伽(サンカ)の中で年長で上位に位置している者ですが、これまでの修行のおかげで、『煩惱』に惑(まど)わされない身となり、『苦』から解脱する境地を得ることができました。しかし、私たちは年を取ったことを理由に、今後はこれまでのような修行には堪(た)えられないと思い、／『復(また)阿耨多羅三藐三菩提を進求(しんぐ)せず』 もうこれ以上の精進に励み、『仏に成る』という最も大切な目的を、求めずにいました」

【一六頁終四行】「世尊は私どもにみ教えをお説き下さいましたが、じつは私たちはお説法の場にいなながらも、／『我(われ)時に座に在って身體(しんたい)疲懈(ひけ)し、但(ただ)空、無相・無作(むき)を念じて～佛國土を淨め、衆生を成就するに於て、心喜樂(きぎょう)せざりき』 時には気だるくなり、『これ以上教えを聞く必要はない』などという傲慢(ごうまん)な心を起こしたこともありました。そして頭の中は『世の全てはただ一つの《空》であり、固定した相(すがた)はない《無相》である。つまり、“ものはみな平等であるから、すべてを平等にみてゆき、あくまで平等に扱ってゆかねばならない”という思想・思索(しやく)にとらわれて、世尊が説く『すべての人は仏性を具えていることを悟り、平等だけではなく、人々の間にある『違い』をしっかりと認めて、それぞれにふさわしい教えを自由自在に説いて、すべての人を人格完成の境地まで導く』という《菩薩の法》を、求めようなどとは致しませんでした。本当に申し訳ございませんでした」

【一六頁終二行】「なぜそうであったかを反省しますと、世尊は私たちを『世の現象にとらわれず、煩(わづら)わされない境地』へ、方便を用いてお導きくださったのですが、私たちはもうそれだけで満足しきっていました。／『又今(またいま)我等年已(すで)に朽邁(くまい)して、佛の菩薩を教化したもう阿耨多羅三藐三菩提に於て、一念好樂(こうぎょう)の心を生ぜざりき』 しかも年齢を重ね老いぼれてしまったため、仏さまが菩薩たちを『仏の悟りを得る』ように導く尊い場面を目(ま)の当たりにしましても、私たちはそのことに恐れ、さらに精進して『仏の悟りを得る』ことを願うなど致しませんでした」

【舍利弗への授記を目の当たりにした感動】——

【一七頁一行】「ところが、仏さまが声聞の舍利弗に対して、『必ず最高の悟りを得る』という保証を授記されたことを直接拝見し、私どもは未だかつてない感激と喜びを覚えました。／『於今(いま)忽然(こつねん)に希有(けい)の法を聞くことを得んとは。深く自ら慶幸(きょうこう)す』 今に至って、突然、このような教えを頂くとはい。なんと有り難いことか。私は自分で自分を祝福したいと思いです。／『無量の珍寶(ちんぼう)、求めざるに自(おのずか)ら得たり』【(偈)一二五頁八行】『無上の寶聚(ほうじゅ) 求めざるに自(おのずか)ら得たり』 **まさに、はかり知れない無量の『宝』が、求めもしなかったのに自然と自分のものになりました**」

【一七頁五行】「世尊よ。私たちが信解いたしましたことを、次に『警え』をもって申し上げたいと存じます。私たちの領解(しんげ)・理解したことをお聞き願います。

【『長者窮子(ちょうじゃ ぐうじ)の警え』】——

【一七頁五行】【(偈)一二五頁終四行】——「ある人が幼い時、無知であったために、父のもとからさまよい出てしまいました。その後、諸国を放浪し、その日暮らしの食うや食わずの

貧しい生活を送ることになりました。そうした日々は50年間も続きました。／（『年既（としすで）に長大して加復（ますますまた）窮困（ぐこん）し』）年を重ねるごとに貧しさは増してゆき、ただただ衣食を求めて四方をさまよい歩き続けるのでした。／（『漸漸（ぜんぜん）に遊行（ゆぎょう）して本國に遇（あ）い向いぬ』）しかし不思議なことに放浪して行くうちに、足は自然と父のもとへと進んで行ったのでした

【一七頁 終五行】【(備) 一五頁 終三行】「一方、父は子を失って悲しみ、懸命に子を探し求めたのでした。しかし、どうしても探し出すことができずにいました。①そして、しかたなくある都にとどまることにしました。父の家は大変栄え、金・銀・サンゴ・琥珀（こはく）などをはじめとする財宝が数えきれないほどあり、何不自由ない生活をしていました。たくさんの倉庫は貴金属や宝石で満ち溢（あふ）れ、使用人やお手伝いは大勢いて、多くの役人が仕えています。富の象徴である象や馬、そして牛・羊などの家畜、乗り物なども無数にあります。また、他国との貿易も盛んで、商人や顧客たちが絶えることなく出入りしており、父は多くの人々から敬われ、国王からも尊敬を得ておりました」

【一七頁 終行】「一方、息子は、すっかり貧窮（ひんきゅう）の身となってさすらっていましたが、ついに父の屋敷がある都（城郭市・じょうかくとし）にたどり着いたのでした」

【一八頁 一行】「父はこの50年余り、かた時も息子のことを忘れたことはありませんでした。②いつも息子の身を心配していました。しかしその胸の内を、他人に打ち明けたことはありませんでした。いつも自分一人の胸の中で案じ、悩んでいたのです。そして次のような心配を思いめぐらせていました」。

【一八頁 三行】【(備) 一六頁 四行】「『私はすっかり年老いてしまった。だが数えきれない財産がある。倉庫にはあふれるほどの金・銀・財宝がある。それなのに私には子どもがいない。もし私が死んだら、この財産を相続して任せる者がいないため、財産はむなしく散り散りになって無くなってしまおうだろう。そう考えると、さまよい出た息子のことが思い出されて仕方ない。もしあの子がいてこの財産を任せることができるならば、どれだけ嬉しく、安心することができるであろうか』と」

【長者(仏)の威徳】——

【一八頁 六行】【(備) 一六頁 七行】「父の住む都にたどり着いた息子は、とうとう父の屋敷に来たのでした。そして、屋敷の門にたたずんで、はるか遠くの屋敷内の様子を見ていると、威厳のある高貴な男の人が座っています。その男性こそ父なのですが、そのことを窮子は知る由もありませんでした。父は立派な椅子に堂々と腰をかけ、豪華な足置き台（フットレスト）に両足を乗せて悠然と座っています。まわりにはバラモンやクシャトリア、ヴァイシャなどの上流階級（カースト制の上流階級）の人々が仕えています。父は大変高価な真珠の首飾りを身に着け、扠子（ほっす・棒の先に獣毛や麻繊維が付いた法具の一種）を持った召使いが両脇に立っています。頭上には立派な天幕が張られ、数々の美しい旗が立ち並び、香水と美しい花々が地面にまかれています。宝物がズラリと並べられ、盛んに出し入れをして人々に与えています。その様子は大変立派で豪勢。威厳に満ちたものでした」

【凡夫と教えとの関係／仏性の自覚がない凡夫】——

【一八頁 終行】【(備) 一六頁 終行】「父の威厳の様子をみて、息子は恐怖心を覚えました。むし

ろ、とんでもない所に来てしまったと後悔し、次のように思いました。『あのお方は王だ。こんな畏（おそ）れ多い所はオレがいる所じゃない。ましてやオレのような者を雇ってくれる所でもない。貧民街に行けばオレに見合った仕事があり、糧（かて）を得ることが出来る。こんなところに長居（ながい）していると、捕（つか）まえられて強制労働をさせられるに違いない。早く逃げ出さなければ！』と、走って逃げ出しました」

【一九頁五行】（『子を見て便（すなわ）ち識（し）りぬ）【(備) 一七頁五行】（『黙して之（これ）を識（し）る』）「その時、父はその子の姿を一瞬見て、無言のうちにそれが我が子であることに気づきました。③ そして、喜びで心が弾（はず）み、こう思いました。『やっと私の財産を任せる者がやって来た！ 今まで探し出せなかったが、子どもの方から私の所へ帰って来てくれた。これで私の願いをかなえることが出来る！ 私は年をとってしまったが、今でも子どもへの愛情は変わるものではない。どうしようもなく深いものだ』と。すると父は家来（けらい）に、その子を連れて来るように命じました。④ 家来は大急ぎで追いかけて、窮子（くうじ）を捕（とら）えました」

【一九頁終四行】「ところが親の心を知らない窮子は、突然つかまえられたので驚き、『私は何も悪いことをしていません！ なぜ、つかまえるのですか！』とわめき叫びました。窮子が暴（あば）れ出したために、家来はますます力づくで取り押さえます。そして無理矢理連れ去ろうとします。窮子は『何の罪もないオレをこうしてつかまえるので、きっとオレは殺されるに違いない！』そう思うと恐怖のあまり、とうとう窮子は気絶して倒れてしまったのでした」

【二〇頁一行】「その有り様を遠くから見ていた父は、家来に命じ直し『もうその子を無理に連れて来る必要はない。⑤ 冷たい水を顔にかけて目を覚ましてやりなさい。⑥ /（『復（また）與（く）みし語ることなかれ』）そして正気に返っても何も話すのではない』⑦』と告げました。なぜ父はそう命じ直したのかと言いますと、その子が父のような高い地位に近寄れないという、卑屈な心になり切っていることを知ったからであります。⑧ そしてわが子であることはハッキリと解ってはいましたが、しかしそのことを他人には打ち明けませんでした。⑨」

【二〇頁五行】「家来は長者の命ずるとおりに水をかけ、窮子（くうじ）の目を覚まさせてやり『許してやるから、好きな所へ行け』と言い放ちました。窮子は起き上がって逃げ出し、そそくさと貧しい街へと向かいました。そして衣食を求めその日暮らしの日々を、ふたたび送るようになりました」

【二〇頁七行】【(備) 一七頁終四行】「それからしばらくすると父は、何とかして我が子を引き戻すために、貧民街にいる子どもの所へみすぼらしい身なりをした二人の召使いを差し向けました。⑩ 一人は片目が見えず、もう一人はくる病で小児のような小さな体格となった男です」

【二〇頁七行】【(備) 一七頁終三行】「長者は二人の召使いに次のように申し付けました。『あの男の所へ行って『良い仕事がある。賃金は倍だ』と言いなさい。⑪ もし男から『どんな仕事か？』と問われたら、『糞尿を処理し、ドブなどの掃除する汚い場所の仕事だ。⑫ そして俺たちも一緒に仕事をするのだ⑬』と告げなさい』と命じました」

【二〇頁終行】「二人の召使いは貧民街で窮子を見つけ出して、言い付けどおりに告げまし

た。すると窮子はその話を受け入れ、喜んで長者の屋敷についてきました。そして最初に賃金を先払いで受け取り、⑭ それから汚物掃除を始め、一生懸命働きました。しかし、不浄の仕事をしているわが子のあわれな姿を見て、父は悲しくもありました」

【人を救う順序】――

【一頁二行】【(備)一七頁終行】「それからしばらくして、父が窓から子の様子見ていると、窮子はすっかりやせ衰え、体中を糞尿で汚して働いています。それを見た父は不憫(ふびん)さがつのりました。／(『即(すなわ)ち瓔珞(ようらく)・細纒(さいなん)の上服(じょうふく)・嚴飾(ごんじき)の具を脱いで、更に麤弊垢膩(そへいくに)の衣(ころも)を着(き)、塵土(じんど)に身を全(けが)し、右の手に除糞(じょふん)の器(うつわ)を執持(しゅうじ)して』)【(備)一八頁一行】(『弊垢(へいく)の衣(ころも)を着(き)、除糞(じょふん)の器(うつわ)を執(と)って』)すると父はあろうことが自ら豪華な首飾りや着物を脱ぎ捨て、不浄で汚い着物を身にまといました。そして泥で身を汚し、右手に糞尿を取る器を持って、⑮ 働く者たちの所へやって来ました。⑯ そして一緒に働くみんなに『しっかりと働きなさい。怠(なま)けてはいけませんよ』と声をかけ、徐々に窮子の警戒心を解きながら近づいていきました。⑰」

【人が救われる順序】――

【一頁六行】「こうして一緒に働きながら、ついに窮子のそばに行くことが出来た⑱父は、我が子に対して、『お前は可哀相だな。食べることに困っているじゃないか。しかしこれからは大丈夫だ。⑲ ここは賃金(賃)が上がる所で、しかもお前に必要な食料や生活用品はいくらでもある。⑳ さらに年を取った使用人もいる㉑から、必要だったら世話をしてもらえ。ちゃんと生活ができるので安心してずっとここにいと良い。㉒ 私は年を取ったが、お前は若くてまるで息子の年頃だ。だから私はお前のことを身近に感じるよ。㉓ これからお前は人を怒ったり恨んだり、憎まれ口をきいたりしてはいけませんよ。㉔』(『都(すべ)て汝(なんぢ)が此(こ)の諸惡(しよあく)有(あ)らんを、余(あま)の作人(さくじん)の如(ごと)くに見(み)じ』) お前はほかの人と違って悪い所が無い。㉕ もしお前が悪いことをしたら、私は悲しいよ。㉖ これからはお前を我が子のように思うからね㉗』と言って、その場で窮子の名前を付けてやり、仮の子にしたのでした。㉘」

【一頁二行】「窮子は思いがけない待遇に大変喜びましたが、それでもまだ自分は居候(いそうろう)の身の労働者で、卑(いや)しい人間だと思い込んでおり、卑屈(ひくつ)な根性は抜(ぬ)き出(だ)せませんでした」

【一頁二行】【(備)一八頁五行】(『二十年(にじゅうねん)の中(うち)に於(お)て常(つね)に糞(あか)を除(はら)わしむ』)「それから20年の長い間、長者は窮子に不浄の仕事(不浄)を続けさせました。㉙ 長者は大きな智慧(ちゐ)を用いて、窮子をだんだんと屋敷に自由に出入りするよう仕向けました。㉚ そしてこの20年(にじゅうねん)が過ぎると、窮子にとってはその家(うち)に対する心安(あん)さが生(な)じ、屋敷(やしき)を出入りするのにおびえを感じないようになり、オドオドしなくなりました。でも、窮子が住んでいる場所は最初に与えられた小屋(こや)のままでした」

【一頁四行】「それからしばらくすると長者は病気になり、自分の命(いのち)はそう長くはないことを悟(さと)りました。長者は窮子(きうし)を呼(よ)んで『私は莫(も)大な財産(ざいぜん)を持ち、金銀財宝(きんぎんざいほう)が倉庫(くら)の中(うち)に入りきれないほどある。その“財産管理(ざいぜんかんり)”すべてを(すべて)お前(まへ)に任(まか)せたい。㉛ 』だから財産

の一切を知り尽くして欲しい。なぜこの大切な仕事を任せるのかと言えば、／（『今我と汝と便(すなわ)ち爲(こ)れ異らず』）もうお前と私は他人ではない。⑳ だから任せるのだ。どうか無駄に財産を使わないように注意をして欲しい㉑』と申し渡しました」

【一二頁 終五行】「窮子は長者の言い付けどおりに倉庫の金銀財宝をしっかりと管理し、財産のすべてのありようを熟知(じゅくち)するようになりました。／（『而(しか)も一餐(いっさん)を恠取(けしゅ)するの意(こころ)なし』）そして、ほんの一度の食事代すらごまかして自分のものにしようとはしませんでした。しかし自分の住まいは依然として小屋のままであり、自分は卑しい人間だという卑屈な根性を、すっかりとは抜け切れずにいました。さらには、これらの財宝が自分のものであるとは夢にも思いませんでした」

【一二頁 終二行】【(備)一八頁 七行】「それからしばらくののち、子の心が広く悠然(ゆうぜん)となり、卑屈な心もなくなり、全財産をしっかりと管理・運用できる能力を具えたことを父は見取れるようになりました。そして父は自分の死期が近くなったことを悟ったその時、子に命じて親族・国王・大臣・武士・家臣・実業家など、かねて交誼(こうぎ)を持つ人々をみんな集めるよう命じました。㉒」

【一二三頁 二行】【(備)一八頁 終四行】「そこで集まった人々を前にして父は次のように発表しました。㉓ 『みなさん。よく聞いてください。この男はじつは私の実の子どもでもあります。私がある城にいた時、この子は私の元からさまよい出てしまい、生活に苦勞し、落ちぶれ、50年の間、放浪しました。この子の本当の名前はこれこれで、私の本当の名前もこれこれと言います。この子がいなくなった時、元の城にいた私は大変心配し、わが子を一生懸命探しましたが残念ながら探し出すことは出来ませんでした。ところがこの街で偶然に出会うことが出来たのです。この男は本当に私の子です。そして私はこの子の実の親です。ですから、私が所有する全ての財産は、みんなこの子のものです。しかもこれまでにこの子には、財産の支出・収入など一切の運用・管理を任せていましたので、この子はその全てを熟知するに至っています』と告げたのでした」

【一二三頁 七行】【(備)一九頁 一行】「窮子は父の言葉を聞いて、言いようのない歡喜を覚えました。今まで経験したことのない喜びでした。そして心の中でこう思いました。『私は、こうなりたいなどは少しも考えたことはなかった。／（『今此(いまこ)の寶藏(ほうぞう)、自然(じねん)にして至りぬ』）しかし、この素晴らしい莫大な財産が、自然と自分のものとなった。なんと不思議なことであろう。なんと有難いことだろう。誠にもったいないことだ』と心から感激したのでした」

—— 以上【『長者窮子の警え』】

【『長者窮子の警え』のかみしめ】——

「世尊よ。私どもが信解したことを、この警えをもって申し上げました」

【一二三頁 終四行】「世尊よ。この大長者はまさに世尊でございます。私どもはみな世尊の子であり、実際に世尊はこの大長者のように、／（『如來常に我等を爲(こ)れ子なりと説きたまえり』）我々を我が子であるとおっしゃって下さいました」

【窮子の愚かさ、凡夫の愚かさについて】——

【一二三頁 終二行】（『我等三苦を以ての故に、生死(しょうじ)の中に於て諸の熱惱(ねつのう)を受け、迷惑無知にして小法に樂著(ぎょうぢやく)せり』）「世尊よ。私どもは本能的に感じる苦《苦苦・

く)、楽しみが取り払われた時に感じる苦《壞苦・えく》、ものごとの変化によって覚える苦《行苦・ぎょく》の三つの苦しみ《三苦・さんく》に苛(さいな)まれており、流転(るてん)極まりない人生を歩み、様々な変化に、激しく悩み・苦しみに溺(おほ)れています。なぜ、その悩み・苦しみにから抜け出せないのかといえ、それは真理を知らないために起こるものです。ですから真理をわかっていない私たちは、その苦の解決をするためにはどうして良いかを解らず、結果的に目先の考え、真理とは程遠い低俗な教えにすがってしまい、苦の解決だけを模索していました」

【四大声聞の心境の告白。懺悔をあらためて表白】——

【一三頁 終行】(『諸法の戲論(けろん)の糞(あくた)を蠲除(けんじょ)せしめたもう』)「世尊は、真理をお説き下さり、そのおかげで私どもは、ちゃんと真理に基づく思考・捉え方ができるようになり、低級な教えから解き放たれて心の塵芥(ちりあくた)を払うことができました。そしてそれによって私たちは、／(『勤加精進(ごんかしょうじん)して、涅槃に至る一日の價(あた)いを得たり』)昨日よりも今日、今日よりも明日へと精進を積み重ねていくことが出来、心の平安を頂くことが出来るようになりました」

【一四頁 二行】「しかし残念なことに、私どもは苦から離れる『心の平安』を得ただけで満足していました。【(偈)一三〇頁 四行】／(『一切の諸法は皆悉く空寂にして無生・無滅無大・無小無漏・無爲なり是の如く思惟して喜樂(きぎょう)を生ぜず』)ものごとには差別などない『ただ一つである』という《空》の教えを、ただ自分の思索・頭の中だけでとどめてしまい、『心の平安』という小さな悟りの成就に満足しきっていました。ですから『仏に成る』、『仏の悟りを得る』という最高の悟りを得ようとは思いませんでしたし、【(偈)一三〇頁 六行】／(『復(また)志願なし』)求めようとも致しませんでした」

【一四頁 五行】【(偈)一二九頁 三行】「ところが世尊は、こうした私どもの心、これまでの精進の在り方をご承知ですので、小さな悟りで満足しきっている私どもに対して、／(『爲に汝等(なんだち)當(まさ)に如來の知見・寶藏(ほうぞう)の分あるべしと分別したまわず』)『お前たちは如来と同じ悟りが得られるのだ』とは、あえておっしゃられませんでした」

【一四頁 六行】【(偈)一三〇頁 一行】「世尊は大きな方便力によって私どもに仏の智慧を説き示してくださいましたが、ただ私どもは、苦にとらわれない『心の平安』を得るだけでとどまり、／(『涅槃一日の價(あた)いを得て、以て大(おおい)に得たりとして、此の大乘に於て志求(しぐ)あることなかりき』)その日その日の安定を得るだけで満足していました。ですから私どもは、今以上の最高の悟りを得ようなどという志を起さなかったのです。／(『而(しか)も我等眞(まこと)に是れ佛子なりと知らず』)しかも自分が最高の『仏の境地』を得られる身であり、仏子であることには気づきもしませんでした」

【(偈)一二九頁 五行】「世尊は、『最上の悟りを求めて修行をする者は、必ず仏になることができる』と仰せになっていました。そして最上の悟りを得るために、／(『諸の因縁 種種の譬諭 若干(そくばく)の言辞(ごんじ)を以て 無上道を説く』)世尊は、さまざまな実例や体験に基づいて説く『因縁説周』、譬えを引いて説明する『譬説周』、そして理論的に説き示す『法説周』を用いて、『最高無上の教え』をお説きくださいました。まさに『三周の説法』を尽くしてご教示くださいました」

【仏の大慈悲が分かった四大声聞の喜び。無量を智慧を得た喜び】——

【(一四頁 終二行) [(偈) 一三頁 四行] (『今我等方(まき)に知んぬ、世尊は佛の智慧に於て憐愍(りんじやく)したもう所なしと』)「今、ハッキリと解りました。世尊は私どもに対して惜しみなく『仏の智慧』をお与えくださり、『大乘の教え』をお説きくださっておられたことがよく分かりました。／(『今此の經の中に唯一乘を説きたもう』)そしてこの法華經において、世尊は『教えはただ一つしかない』とお説きくださいました。今までの私どもは、理解する力が至らないために、世尊がお説きくださる教えを小さくにししか受け止めることが出来なっていました。しかし今こそ、この大切な教えをしっかりと受け止めさせて頂くことが出来ます。今、私どもはこれまで経験したことのない大歡喜を覚えています。／(『今法王の大寶(だいほう)、自然(じねん)にして至れり。』)そして、自分では求めもしなかったのに、大きな宝を自然と自分のものとなり、大変感激を致しております」

【仏の大慈悲に対する感謝と決意】——

【(偈) 一三頁 五行] (『我今 道(どう)を得(え)果を得 無漏(むろ)の法に於て 清淨(けいじやう)の眼(まなこ)を得たり～今無漏(むろ) 無上の大果を得(じ)』)「世尊よ。今、私どもは『本当の仏道』を知りました。修行の『本当の結果』を得ることが出来、《諸法実相》の教えによる『真実のもの』の見方・清らかなるもの見方』を悟らせていただくことが出来ました。私たちは今こそ眞の声聞・阿羅漢の身となりました。／(『佛道の聲(こゑ)を以て一切をして聞かしむべし』)そして一切の人々に仏に成る道を説かせて頂きたいと思います。人間界の全ての人々にとどまらず、神々や鬼神、天上界の人々からも尊敬を受ける身であります」

【(偈) 一三頁 終行] (『世尊は大恩まします』)「世尊には大恩がございます。得難い法に我々をお説きくださり、最上の利益(りやく)をくださり、そのご恩には何万年を費やしてもお報いできません。たとえ全生命を投げ出してお仕えし、一切を捧げて供養を尽くしても、そのご恩にお報い出来るものではありません。／(『恒沙劫(ごうじゃく)に於てすとも 亦報(またほう) ずること能わじ』)無限の時間をかけてあらゆるご供養を申し上げても、世尊の尊いご恩にはお報いすることが出来るものではございません」

【仏の大徳を讃嘆。仏への感謝】——

【(偈) 一三頁 六行]「諸仏はこの世に類稀(たぐいまれ)な尊いお方です。はかり知れない大神通力を具え、／(『無漏・無爲にして 諸法の王なり』)一切の迷いから離れ、最高の真理を悟っておられる『法の王』であります。ですから、機根の低い者や、／(『取相(しゆそ)の凡夫に 宜しきに隨(したが)って為に説きたもう』)現象にとらわれてしまう凡夫に対しても、相手の段階にふさわしく、相手の欲望や程度にしたがって意のままにお導きをくださいます。／(『宿世の善根に隨(したが)い 又成熟 未成熟の者を知しめし』)しかも仏は、その人が前世にどれだけの善根を積んでいたのか？ それによって現世において教えを聞く力がどれだけ熟しているかを、明らかに見通されています。／(『分別(しる)しめし已(おわ)って 一乘の道(どう)に於て 宜しきに隨(したが)って三と説きたもう』)そうして、ただ一つしかない『真理の教え』、『仏の道』を相手の機根に合わせて適宜に三つに説き分けてお導きくださるのであります。本当に有難うございます」と、摩訶迦葉(ま

か かしょう)ら四大声聞たちは、世尊に『法悦と感謝』を申し上げたのでした。



『信解品』の意味。何を信解したのか。

(P353・4行/P269・3行)

(四大声聞は)何を完全に信解したのかといえば・・・、

第一に、《方便品》で説かれた教えです。つまり、諸法実相のことです。

第二に、〈仏はさまざまな方便をもちいて、教えを説かれるけれども、つまるところは、すべての人びとに自身の仏性を発見させ、仏の境地を悟らせてくださる一事に帰するのだ〉
ということです。～(これらのことを)悟得(ごとく)しただけでなく、「このように悟りました」ということを、くわしく世尊のおん前に表白します。

『但空、無相・無作を念じて、菩薩の法の遊戯神通し、佛國土を淨め、衆生を成就するに於て、

心喜樂せざりき』

(一一六頁 終四行)

平等と差別の両面を見る

(P362・3行/P275・終2行)

これ(すべてを平等に見ること)は、ひじょうに高い思想にちがいないのですが、それだけにとらわれてしまうと、実際の教化・救済の活動のブレーキがかけられることになります。

～(千差万別の)その差別相をあきらかに見分けて、それぞれの人にふさわしい教えを方便して説かなければ、教化・救済の効果があらわれるはずはありません。

こうした教化・救済の活動こそ菩薩の法なのです。菩薩の法とは、つまるところ、人びとの差別相を心の奥までハッキリと見通し(神通)、それにピッタリ合った教えを自由自在に説き(遊戯・ゆげ)、世の中を美しく平和にし(仏國土を淨め)、すべての人びとの人格を完成(衆生を成就)することにあるわけです。

※『諸法如實の相を觀じ、亦不分別を行ぜざる。是れを菩薩摩訶薩の行處と名く』

(『安樂行品』二四一頁 終二行)

《愚惟のひととき ①》

「ものごとを『平等』でみることは尊いことだが、それだけで終わってしまうと、教化・救済の効果はあがらない。大切なことは千差万別の違いを見分けて、それぞれにふさわしい教えを方便として説くことだ」。また、「〈菩薩の法〉とは、人々の違いをハッキリと見通し、それにピッタリと合った教えを自由自在に説き、世の中を幸せにし、すべての人の人格を高めていくこと」だと庭野開祖は説かれます。
—— この教えを、あなたはどのように受け止めますか。かみしめてみましょう。

またいまわれらとしすで くまい
『又今我等年已に朽邁して、佛の菩薩を教化したもう阿耨多羅三藐三菩提に於て、一念

こうぎょう
好樂の心を生ぜざりき』 (一一六頁 終行)

「また年齢を重ねて老いぼれてしまったために、仏さまが菩薩たちを『仏の悟りを得るように導く』という有難い情景を目(ま)の当たりにしましても、私どもは『仏の悟りを得る』ことを心から憧れ、願うなどという考えを、まったく起こさなかったのをごさいました」

《患惟のひとつき ②》

四大声聞は「年をとったために『仏の悟りを得る』ということを目(ま)から憧(あこ)がれ、願うことはなかった」と懺悔しています。

年齢を重ねるだけでなく、信仰の年月が長くなると、ともすると精進自体がマンネリ化し、信仰の本来の目的である『仏の悟りを得る』ということをおろそかになることもあり得るかもしれません。

—— この四大声聞の懺悔を通して、果たして今の自分の信仰姿勢は、本当に『仏の悟りを得る』ことを願ひ、目指しているか？ 振り返ってみましょう。

いまこつねん けう
『於今忽然に希有の法を聞くことを得んとは。深く自ら慶幸す』 (一一七頁 三行)

「今、こうして稀有(けう)の貴重なお手配を頂けたこと(『諸法実相』の真理を伺ひ、そして自分と同じ声聞の境地の舍利弗に成仏の保証を頂いたことを目の当たりにしたこと)は、まったく予想もしていなかったことで、このような掛け替えのない大きな利益(りやく)を頂戴することが出来て、心の底から深く感謝申し上げます。そして、こうした稀有(けう)のお手配を頂いたわが身を、私は自分自身を祝福したいと思ひます」

《患惟のひとつき ③》

四大声聞は、『諸法実相』の真理を聞けることができ、かつ、自分と同じ声聞の境地である舍利弗に成仏の保証を頂いたことを目の当たりにして、「こうした稀有(けう)のお手配を頂いたわが身を、私は自分自身を祝福したいと思ひます(『深く自(みづか)ら慶幸(きょうこう)す』)」と、自分で自分を褒(ほ)め、祝福しています。

—— では今世、『遭(あい)難(がた)き尊(たか)い仏縁』、『庭野開祖・庭野会長という尊(たか)い法縁』に遭(あい)得た自分自身を褒(ほ)め、祝福しているか？ 振り返ってみましょう。

ちやうじゃぐうじ たと
長者窮子の譬え

(P367・1行/P279・終5行)

『四方に馳騁して以て衣食を求め』 (一一七頁 七行)

「あちこちと駆(か)け回(まわ)っては、衣食の糧(かて)を求めていました」

『涅槃一日の價を得て、以て大に得たりとして、此の大乘に於て志求あることなかりき』 (一二四頁 七行)

「私どもは苦にとらわれない『心の平安』を頂くことができ、その日その日に功德を頂くだけで満足していました。ですから私どもは今以上の最高の悟りを得ようなどという志も起こさなかったのです」

《思惟のひととき ④》

① 窮子はその日の衣食の糧(かて)を求めてさまよったとあるのは、「凡夫が目先の欲望・願望をさまよいて求めている姿」をあらわしています。

② さらに四大声聞は、「その日その日に功德を頂くだけで満足し、『仏に成る』ことを目ざさなかった」ことを懺悔しています。

この①と②は次元の差こそあれ、両方とも『仏に成る』ということを目ざさなかったことの意味にほかなりません。

—— ではこの「窮子」「四大声聞」と比較して、今の自分はどうか？ **《思惟のひととき ②》**で振り返ったことの再確認になりますが、いかがでしょうか。

流浪のあげくの回心

(P370・4行/P281・終3行)

煩惱の世界をさすらい歩いたことを悔いる必要はありません。回心(えしん/心をあらためて、正しい道に入ること)さえすればいいのです。～ 煩惱というものを、自分の向上と社会の進歩のための踏み台として生かすことができます。 註：「回心」と「改心」の違い

仏はいつもそばにいる

(P389・終4行/P297・5行)

仏は、事実いつも我々のそばにおられるのです。言いかえれば、我々を生かしている仏の慈悲は、常にあらゆるところに満ち満ちているのです。それなのに、われわれはそれに気がつかない。気がつかないために、いろいろと不自然な心をおこしたり、道にはずれた行ないをして、煩惱のカラをつくり、その中にとじこもってしまうのです。そのために病氣・不和・貧乏というような人生苦がおこってくるのです。～

とにかく仏さまは、常に我々のそばにいらっしゃるのです。ですから、自分でつくった煩惱のカラを取り払いさえすれば、仏の慈悲はいつでも我々を温かく包んでくださっていることがわかるのです。

煩惱のカラを除くには

(P391・3行/P298・7行)

どうしたらカラ(煩惱のカラ)を取り除くことができるのか？ 言うまでもなく仏の教えを学び、実践し、自分が『仏の子』であることを悟ることです。～

とにかく、我々が仏に気が付かなくても、仏は決して我々を忘れてはいないのだということ、これは絶対の真理であります。～

どんなに背こうとも、背いてから何十年たとうとも、仏は衆生に対して変わらぬ愛情をもってじっと見守り続けていてくださるわけです。涙が出るほど有難いことです

『長者獅子の座に於て、子を見て 便ち識りぬ』 (一九頁 五行)

『我年朽ちたりと 雖も猶故貪惜す』 (一九頁 終五行)

《^{しゆい}患惟のひととき ⑤》

「仏はいつもそばにいてくださる。それなのに、われわれはそれに気がつかない。気がつかないために、いろいろと不自然な心をおこしたり、道にはずれた行ないをして、煩惱のカラの中にとじこもってしまうのです。そのために病気。不和・貧乏というような人生苦がおこってくるのです」と庭野開祖は説いています。

—— この開祖の指導を、あなたはどのように受け止めますか？
かみしめてみましょう。

おもむ 徐ろにみちびく

(P402・終5行/P307・4行)

【人を導く時の第一】 『徐(ようや)く窮子に語るべし』(一〇二頁 終四行)

… (「徐」ようやく・とは「徐」おもむろ・と読みます) 短兵急(たんべいきゅう)に切り出すと警戒されますから、はじめはさり気なく話をかけて、だんだんと話をまとめていく～。

げんせりやく と ひつよう 現世利益を説く必要

(P403・2行/P307・終7行)

【人を導く時の第二】 『倍(ま)して汝に價(あた)いを與(あた)えん』(一〇二頁 終四行)

… 凡夫に向かって、はじめから高尚なことをいってみても、なかなか心は動きません。まず現世利益について話をし、さらに導きの第一歩とすることも方便の一つであることが、ここに示されているのです。～ 宗教活動というものは、生きた人間を相手にした血みどろな闘いです。

『^{そへいくに}麤弊垢膩の衣(ころも)を着、^{じんど}塵土に身を塗(けが)し、^{じよぶん}右の手に除糞(うつわ)の器(しゅうじ)を執持して』(一〇二頁 四行)

「すると父はあろうことか自らの豪華な首飾りや着物を脱ぎ捨て、不浄で汚い着物を身にまといました。そしてわが身を泥で垢まみれにし、右手に糞尿を取る器を持ってきました窮子のもとにやって来ました」

(P407・2行/P310・8行)

この長者の行為は、仏さまのこの世への出現を象徴しているのです。柔かい絹の服を着ている身でありながら、わざわざボロをまとい、泥を顔や手足になすりつけ、糞(あくた)をとる器を持って、便所で働く人びとの中に入ってこられたのです。なんとかしてわが子(衆生)を引き上げてあげようという大慈悲心からです。

つくづくとそれを思えば、涙がこぼれてくるのをどうすることもできません。

《^{しゆい}患惟のひととき ⑥》

長者が「^{そへいくに}麤弊垢膩(そへいくに)の衣(ころも)を着て、右手に^{じよぶん}除糞(うつわ)の器(しゅうじ)を持って」現われること。すなわち仏の大慈悲心を —— あなたはどのように受け止めますか？ 噛み締めてみましょう。

すく すく 救い救われる順序

(P410・3行/P313・2行)

- ①【慈悲に出発】第一に長者は『咄(つたな)や男子(なんし)』と言っています。人を救う第一歩は、ああかわいそうだと心の底から湧いてくる情け心でなければなりません。
- ②【心のより所を与える】第二に長者は、所帯道具や食料をあげるから、疑ってはいけないと安心させました。『諸(つもろもろ)の所須(しょじゆ)ある盆器(ぼんき)・米麴(まいめん)・塩酢(えんそ)の属(たぐい)あり、自ら疑い難(はばか)ることなかれ』。信仰を持てばちよとした変化にも一喜一憂しない、グラグラしない境地を得ることができ、心のより所を得、安心を得るよう教化します。
- ③【境遇を左右する境地】第三に長者は、使用人を付けても良いと言います。『亦(また)老弊(らうへい)の使人(つかいびと)あり、須(もち)いば相給(あいたま)わん』。今まで人に使われてばかりいた窮子にとっては、人を使うようになるという人生180度転回する画期的な変化です。信仰を持てば、境遇に対して自由自在を得ることができます。
- ④【仏に生かされている！】第四に長者は『我汝が父の如し、復(また)憂慮(うりよ)することなかれ』と言います。本当の神・仏というものは自分の外にあるものではありません。内外(うちそと)の区別なくこの宇宙間に遍満(はんまん)し、すべてのものを生かしている大生命なのです。～つまり「自分を生かしているのは仏(宇宙の大生命)であり、あなた自身もまた仏の現れだ」ということを知ることができます。

《急(い)催(ひ)のひととき ⑦》

庭野開祖は『救い・救われの手順』を、

①『慈悲』→ ②『心のより所・安心』→ ③『境遇に振り回されない自由自在の境地』→ ④『仏に生かされている・自分自身も仏である』とお説きくださっています。

—— この「4段階の手順」で、あなたは・・・

①「自分の救われ」では、どの段階を求めていますか？ または、現在、どの段階にいますか？

②「人さまをお救いする」場合、相手をどの段階へ導いていますか？ または、相手に向き合う時、どの段階へ導くことを心していますか？ 振り返ってみましょう。

きこん じゆく 機根の熟(ま)するを待つ

(P418・6行/P319・4行)

長者(仏)の方便の素晴らしさです。決して焦らずその人の機根の熟するのを待つのです。機根の熟さぬうちに、急いで打ち明けてみたところで、かえって不幸におとしいれるばかりだからです。

しんぼうづよ しゆぎょう 辛抱強い修行

(P419・2行/P319・終6行)

窮子には窮子の偉さがあります。とにかく二十年以上もの間、汚いところの掃除(煩惱を除く修行)をコツコツと続けてわき目も振らないところは、なみの人間ではできないことです。～ 四大声聞も同じで、煩惱を除く修行を黙々と続けて退転することがなかった「誠実さ」「辛抱強さ」に感嘆せざるをえません。凡夫の身としては、まずその態度に学ぶところがなければなりません。

仏と相通ずる気持ち

(P420・4行/P320・6行)

『亦(また)心相體(こころあいたい)信(しん)して入出(にゅうしゅつ)に難(はばか)りなし』(一二二頁 三行)
—— まことに素晴らしい言葉です。

さすがに二十年以上もたったら、親子の間にはいうにいわれぬ親しみと信頼感ができてきました。『心相體(こころあいたい)信(しん)して』というのがそれです。「体」とは親しみ、「信」というのは信頼感です。～これはじつに大切なことです。お釈迦さまは我々の大恩教主ですから、あくまでも尊び敬わなければなりません。～しかし、仏を他人行儀に畏れ、はばかることはないのです。～一体の存在として、親しみと信頼感をもって、全身全霊が通い合うというのでなければ、ほんとうではありません。

仏と衆生は他人ではない

(P424・終4行/P323・終7行)

『今我と汝と便(すなわ)ち爲(こ)れ異ならず』(一二二頁 七行)

「今こそ、私とおまえは別人ではないぞ」というお言葉です。まさしく、仏と衆生とは別人ではありません。それを、われわれ衆生が知らないだけのことです。

自然にして至りぬ

(P436・4行/P332・5行)

『自然(じねん)にして至(いた)りぬ』(一二三頁 終四行)

—— じつに素晴らしい一句です。

とにかく、悟ろうと力んだり、あせったりするのはムダです。それより教えを少しずつでもいいから、絶えず実践してゆくことです。そうしているうちに、自然と人格が磨かれてゆき、光がでてきます。自分は光っているつもりではなくても、はたからみれば、美しい輝きを発しているのです。

何よりもまず思惟せよ

(P446・4行/P339・7行)

そこでお釈迦さまはまず、『思惟(しゆい)して諸法(しよほう)の戲論(けろん)の糞(あく)たを蠲除(けんじょ)せしめたもう』(一二三頁 終行)ことを教えられました。

何よりもまず「思惟せよ」と教えられたのは重大なことです。何かを拝めとか、誰かに頼めとは決しておっしゃらないのです。「よくよく考えなさい」というご指導なのです。この世界は、一体どんな成り立ちになっているのか、人間とは一体どんな存在なのか——そういう根本的なことがらについて、じっくり考えなさいと言うのです。

※『過去を追うな、未来を願うな。過去は過ぎ去ったのであり、未来はいまだ至っていない。
現在の状況をそれぞれによく観察し、明らかに見よ。今なすべきことを努力してなせ』

— 『中部経典』 —

《^{しゆい}思惟のひととき ⑧》

何か事が起こると、この世の成り立ち（縁起観）を通して「よくよく考える」ことが大切だと庭野開祖は説かれています。

—— では、果たして私はいかがでしょう？ 何か事が起こると、そのことを「縁起観」を通してとらえているか、それとも自分中心の価値観で考えているのか。振り返ってみましょう。（自分中心のわがまま、損得、善悪の基準で物事を考え、人のせいにする受け止め方はしていないか。「縁起観」で受け止めようとしているだろうか？）

^{きんげ}懺悔の^{くどく}功德

(P458・終4行/P348・6行)

こういう懺悔ができるということは、さすがに大声聞だけあります。この率直な告白の態度は、信仰者としておおいに学ばなければなりません。

懺悔というのは、信仰の証となるものです。～（人には説いても、自分自身はいつでも大乘を求める気持ちはなかった — 宗教家が、必ずしもその教えの実践者であるとはいえない）

^{もく}黙して^{これ}之を知る

(P474・4行/P361・4行)

『黙（もく）して之（これ）を知る』。われわれ衆生に対する仏さまのお心です。～ 仏さまの方では、常にわれわれを黙して識（し）っておられるのです。ありがたいことです。

※『世尊は衆生^{じんしん}深心^{しよん}の所念^{しよん}を知り』

(『化城論品』一五七頁 終行)

『唯^{ただ}佛世尊のみ能く我等が深心^{じんしん}の本願^{ほんがん}を知しめせり』

(『五百弟子受記品』一八三頁 終三行)

^{ない}内の^{めつ}滅 ^げ外の^{めつ}滅

(P492・4行/375・終2行)

心内（しんない）の滅度。自分の心の中の煩惱を滅し尽くして、安らかな心境を得ることです。これも確かに滅度には違いないのですけれど、まだ十分な滅度ではありません。これに〈外（げ）の滅度〉が加わって、初めて完全な滅度といえましょう。〈外（げ）の滅〉とは、他の人びとの間の差別感を滅することです。自他一体の実感を得ることです。さらにすすんで、天地万物に対する差別感を無くし、天地万物とひとつ心に溶け合うことです。

^{ぼさつ}菩薩と^{ほんのう}煩惱

(P509・終8行/389・5行)

無漏の境地（むろ・諸法実相を悟ることによって、煩惱から超越した状態）から煩惱をどう見るようになるかと言えば、煩惱というものは、この世界が絶えず変化しながら大きな調和を保って進んでゆく、その巨大な運動のエネルギーの一種だと見ているのです。ですから、煩惱ということをして、とりたてて問題にすることがなくなります。

^{しん}信と^げ解

(P529・4行/403・終8行)

信仰とか宗教とかいうものは理屈ではない、信じなければならぬとよく言いますが、何にも分らずにただ信ずるというのは、大変危険なことです。～ よい教えであっても、わけも分らずにただ信じ込んでいたのでは、何かのきっかけで、その信仰がく

ずれてしまうこともあり得ます。～ そんな信仰は、本当の「固い信仰」ではなく、「頑固な信仰」にすぎなかったのです。～ その『真理を理解する』ということが『解』(け)にほかならないのです。

『仏法の大海は、信に能入なし、智を能度となす』 (大智度論 卷一)

※《能入》とは「能(よ)く仏道に入る」。《能度》とは「能く度(すく)う」の意。

『信有って解なければ無明を増長し、解有って信なければ邪見を増長す。信解円通して

方に行ないの本と為る』 (涅槃経)

(P534・2行/406・終4行)

仏法を学んで理解が深まってくると、自然とこの情操というものが生まれてきます。その宗教的情操を一般に「信仰」と呼んでいます。～ 人を救うエネルギーが生ずるのです。～ 必ず『信・解』両方を兼ね備えるようにならないと本当に力ある信仰にはならないのだということを、しっかりと胸に刻んでおいていただきたいと思います。

信(しん 感情)
+
解(げ 理智) } 信仰(理智+情操) → 行ない

つまり〈信〉と〈解・げ〉と両方兼ねそなえ、それが円通しなければ、本当の信仰とは言えないわけです。～ ですから、何よりもまずその教えをよく学び理解することが大切です。そうすると、そこから自然に〈信〉が生まれ、その〈信〉が〈解・げ〉と渾然一体(こんぜんいつたい)となって強い〈信仰〉となるのです。～ つまるところ、〈解〉から入ってもよし、〈信〉から入ってもよし、しかし、必ずその両方を兼ねそなえるようにならないと、本当に力のある信仰にはならないのだということを、しっかりと胸に刻んでおいて頂きたいものと思います。

《急惟のひととき ⑨》

「〈信〉と〈解〉とを両方兼ねそなえ、それが円通しなければ、ほんとうの信仰とはいえないわけです」と庭野開祖が示すP.535/P.407の図表(上図)を、かみ締めてみましょう。

《急惟のふいかえり まとめ》

今日の『信解品』の学びを通して、何を学び取ったか？
(または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか?) 振り返ってみましょう。

以上